

## <特集 巻頭言>

### 柳宗悦の「未生」についての覚書

西村洋平

今回のカルチュラル・グリーンのテーマである「未生」は、柳宗悦が晩年に自らの美論の中核に据えたものである。柳は『美の法門』の中で、「無有好醜の願」と呼ばれる『大無量寿経』の誓願に着想を得て、美醜が分かれる以前を「未生」や「不生」と呼び、その境地に真の美を見出している<sup>1</sup>。美しいものを生み出そうと造作を加えることも、逆にそうした造作を嫌って無造作に何かを生み出してしまふことも、いずれも美醜の区別の中にある。いわゆる天才的芸術家は、美醜の対立を超越することで真に美しい作品を生み出しうるが、それを成し遂げる人は少ない。他方で、無銘な工人たちも、伝統に身を委ねたり、反復を通じて技が熟練することで美醜から自由な境地に触れ、美しい民藝品を生み出すことがある。柳によれば、罪人であろうと信仰心がなかりうと、すべての人が仏に救われているように、才がなかりうと凡庸であろうと、全ての人が美に迎えられている。このように、本来は一切のものが美のうちにある。それにもかかわらず、「小さな自我」が加わり、美醜の区別を行ってしまうことで、人は本来的な美から離れてしまうのだという。

『美の法門』の「後記」において柳は、「未生」のような禅の語彙に親しみのない人は、「アブラハムの生まれし前に吾あり」というイエスの言葉に置き換えても構わないと言う。さらに柳は、この「ヨハネ福音書」8:58に見られる一節を1955年10月18日に行われた「東洋思想講座 第五回<sup>2</sup>」で取り上げ、「吾あり」(I am)が現在形であることに着目して、それを単なる時制ではなく、過去から未来へと貫く時間軸を超越した「永遠の現在」を指し示すものとして講じている。柳はこの一節を解釈した思想家としてアウグスティヌスに言及するが、このあたりは私のように西洋哲学に親しんだ読者にも比較的馴染み深い文脈だと言える。興味深いのは、柳がこれを「ちよっとおもしろい」と言い添えつつ、9世紀の思想家エリウゲナ(Johannes Scotus Eriugena)にも触れていることである。

エリウゲナは主著『ペリピュセオン』(*Periphyseon*、別名 *De divisione naturae*)の冒頭で、「自然本性」(*natura*)を「あるものとあらぬものを包摂する語」としつつ、それが四つに分割されるとしている。すなわち、(1)創造し、創造されぬもの(神)、(2)創造し、創造されたもの(諸原理)、(3)創造せず、創造されたもの(時間のうちにある被造物)、(4)創造せず、創造されぬもの(存在/非存在の区別を超えた神)である。このうち(1)と(4)は、同一の神をそれぞれ「万物の始原」と「万物の終極」という二つの相から言い表したものとされ、(1)が万物の始まりとしての神のあり方を、(4)が万物の帰着点としての神のあり方を指す。柳はこの創造もされず創造もしない否定的な神の側面を、未生に相当するものだとしている。

柳は、それ自体は創造されない神を、創造するという観点からではなく、むしろ創造しないという観点から捉える発想に着目していたと言える。柳にとって真の美とは、芸術家や工人らの創造以前からすべてを包み込んでおり(創造されない)、原理としてありながらつねに背後に退いている(創造しない)ものだからである。こうした創造しない原理というエリウゲナの発想には、彼が間接的に受容していた新プラトン主義思想の影響があると考えられる。実際、新プラトン主義における原理の理解には、個物のうちに現れながらも、それ自体は個物に還元されないものとして捉えるという特徴がある。新プラトン主義思想を体系化した5世紀の思想家プロクロスは、こうした原理を「分有」という観点から説明するのだが、柳の議論に寄せて、美しい器を例に考えてみよう。器の素材は美を分有するものであり、美はその素材のうちに分有されて現れる。しかし、美は素材の内部にある特定の属性へと還元されるものではない。色や形は美の成立に関わるとしても、それ自体が美ではないからである。柳に寄せて言い換えるならば、仮に同じ色や形を再現できたとしても、そこに造作や小さな自我が差し挟まれるならば、同じ美に達するとは限らない。このとき、器の美を支えるものとして、個物から切り離された(美)そのものが措定されることになる(ただしそれは、個物の美の原理として分有されるものである)。ここまでは、プラトン主義の基本的な構図である。プロクロスはこれをさらに展開して、分有される美の背後に、いかなる個物にも分有されない(美)、すなわちあらゆる美しいものの根拠としての美の位相をも想定する。器や作り手と直接に関係を結ぶことなく、あらゆる美しいものを可能にする根源としての美である<sup>3</sup>。

エリウゲナの言う創造されず創造しないものとは、このように世界に美を生み出す分有という原理的な仕組みの背後にあって、それを根拠づけるような「(究極原因として)分有されぬもの」だと言える<sup>4</sup>。私としては、柳の「未生」をこのような新プラトン主義的な原因・原理の類型のうちに捉え直してみたい。もっとも柳の場合、その根源は、新プラトン主義に典型的に見られるような、精神修養を通して原理へと上昇するというモチーフとして理解されるのではない(天才による自力はこれに近いかもしれないが)。むしろ、造作と自我を捨て去ったとき、はじめからそこにあったものとして、いまだ生まれざるもの——すなわち「未生」——として見出されるのである(柳はこれを単純な他力の道とはせず、「自他両門一如」と表現している<sup>5</sup>)。柳がこうした発想に接近しえた背景には、彼が初期から神秘主義思想に強い関心を抱き、その中で新プラトン主義的な思想にも触れていたことがあると考えられる。それを踏まえて、彼のエリウゲナ読解がどの文献や思想的媒介(たとえば西田幾多郎)を通じて可能となったのかを、より詳細な文献学的調査に基づいて検討することが今後の課題である<sup>6</sup>。

また、柳が最後に到達した「無有好醜」の境地については、美を語ることがどこまで可能なのか——たとえば美醜の差が消えるなら「美」を語ること自体が成り立つのか、という問いが残る。浅倉が指摘するように、そこでは美の問題そのものが従来の形では立てにくくなる、という緊張もある<sup>7</sup>。しかし柳において美は、そもそも人間が構成する価値ではなく、本来的にすでにあるものであり、我々はすでに美に救われている、という信仰に近い確信として語られている。だとすれば、より有益な問いは、「未生の境地において美が問われなくなるのではないか」ではなく、むしろ「なぜ未生が美だと言えるのか」、さらに言えば「超越的な美のあり方を、いかにして美として言い表すのか」という点にあるように思われる<sup>8</sup>。たとえばプロティノスは、知性的な美をも超越した一・善もまた美であると語ることがあるが(VI, 7, 33)、それはなぜなのか、あらためて問われる。柳の民藝論もまた、美の根源の問題を改めて私たちに開いているように思われる。そしてそこでは、仏教思想、西洋神秘思想、そして哲学・美学的思索が一つの問いのもとに交差しているのである。

柳の初期の学びと晩年の思索が多領域を横断して一つに結びついたように、この研究会の場でも、「未生」という語を媒介に、各々の学びが思いがけない仕方で接続され新たな思索が生まれることを期待したい<sup>9</sup>。

- 
- <sup>1</sup> テキストは『柳宗悦 仏教美学論集』(日本民藝館、2025)所収のものを参照した。
- <sup>2</sup> 本講座の録音テープからテキスト化されたものが、前掲の論集(240-260)に収められている。
- <sup>3</sup> こうしたプロクロスの有分や原因論については、堀江聡・西村洋平「プロクロス」『新プラトン主義を学ぶ人のために』(世界思想社、2014)を参照。
- <sup>4</sup> エリウゲナの新プラトン主義的な要素については、Michael Harrington を参照(‘Eriugena and the Neoplatonic Tradition,’ in *A Companion to John Scotus Eriugena*, edited by Adrian Guui, Brill, 2020, 64-92)。
- <sup>5</sup> 『美の法門』42。
- <sup>6</sup> 柳とプロティノスについては、足立恵理子「柳宗悦によるプロティノス受容—日本民藝館での資料調査をもとに—」『新プラトン主義研究』近刊予定が参考になる。また足立は、柳のエリウゲナへの関心は西田幾多郎を媒介とした可能性があると個人的に指摘してくれた。実際、足立が示唆するラファエル・ロペス・シロニス『エリウゲナの思想と中世の新プラトン主義』(創文社、1992)の付録には、西田がエリウゲナのどのようなテキストや論点に関心を寄せていたのかが整理されており、柳の関心との近さが示唆される。さらに、西田の純粋経験・直感との関連でエリウゲナが引き合いに出されることは、今義博「西田哲学と中世の新プラトン主義」『新プラトン主義研究』第 6 号(2006、47-59)も論じている。浅倉祐一郎「柳宗悦の美学と西田幾多郎の「純粋経験」—初期論文を中心に—」『場所』第 5 号(2006、99-120)も含め、柳・西田・エリウゲナの思想的連関を文献学的に確定していくことが、今後の課題となる。
- <sup>7</sup> 前掲の浅倉(2006、114)を参照。
- <sup>8</sup> 浅倉は結局のところ民藝理論は「柳宗悦の眼」によって立つ個人的なものではなかったのかと問うている。柳研究の射程でこの点を確定することは専門外の私の手に余るが、本稿では少なくとも、「未生」という発想が、分別以前の根源(永遠の現在／創造しない神／有分されぬもの)を措定するという点で、西洋哲学にも見出される思考の類型と重なるのであるということを描きたい。
- <sup>9</sup> 本エッセイの執筆にあたっては、足立恵理子氏より柳宗悦に関する多くの文献情報および貴重なコメントをいただいた。ここに記して感謝申し上げる。